

# リア友とネッ友に対する自己開示の差

## —Twitter を題材に—

安達 悠子<sup>1</sup>・北島 紫帆<sup>1,注1</sup>

(<sup>1</sup> 東海学院大学)

### 要 約

実生活で知り合い交流がある友人（リア友）と Twitter を通じて知り合い対面することなく SNS 上で交流をする友人（ネッ友）に対して自己開示の程度に差があるかを検討した。18-30 歳の男女を対象に Web アンケートを Twitter で拡散し、67 名から回答を得た。自己開示に関しては、丹羽・丸野(2010)を用いて、レベルⅠ：趣味、レベルⅡ：困難な経験、レベルⅢ：決定的ではない欠点や弱点、レベルⅣ：否定的な性格や能力という 4 つのレベルで自己開示の深さを測定した。その結果、すべてのレベルでリア友へはネッ友に比べて自己開示が高かった。リア友については主たる交流手段が実生活の場合と SNS である場合の自己開示の差を検討したところ、レベルⅣ：否定的な性格や能力においては交流手段が実生活である場合は SNS である場合よりも自己開示は高かった。ネッ友については公開アカウントと鍵付きアカウントで自己開示の差を検討したが、両者に自己開示の違いは見られなかった。

キーワード：自己開示、青年、友人、Twitter

### はじめに

#### FTF と CMC での自己開示の差

古川(2008)は自己開示の定義を概観し、「自らが本当の自分であると認識している自己に関する情報を、特定の相手に、伝える意思を持って、言語的に伝達すること」と定義している。自己開示については、顔を合わせてやり取りをする対面場面（face to face :FTF）とインターネットを介したコミュニケーション（computer-mediated communication :CMC）との比較に興味をもたれ、これまでに様々な研究が報告された。そこでは FTF と CMC のどちらでより自己開示するかという知見は混在している（e.g., 佐藤・吉田, 2008）。この知見の違いは、自己開示の対象が初見の相手であるか既知の相手であるか、自己開示する者の個人要因、CMC の種類といった複数の要因が絡むためだと考えられる。そのため、FTF と CMC という大きな括りで自己開示の差を比較するのではなく、自己開示の対象者や自己開示する者の個人要因、CMC の種類を限定して検討する必要がある。ここでは自己開示の対象が友人、自己開示する者が青年に焦点をあてたい。

友人に関しては、近年は「リア友」、「ネッ友」と呼ばれる友人あるいは友人関係の区分が存在する。リア友とは実生活で知り合い交流がある友人で、ネッ友とはインターネット上のメディアを通じて親交があるものの、現

実世界では接点がなく交流を持たない友人である。リア友とネッ友への自己開示の違いは FTF と CMC 研究の延長上に位置付けて理解することができる。FTF や CMC の研究は初見の相手や実験室実験が多く、リア友とネッ友との比較を直接的に取り上げた研究は少ないが、杉浦・高橋・杉浦（2009）がリア友とネッ友（同研究では「ネットや携帯電話をきっかけに知り合いできた友人」）が両方いる大学生を対象にした調査で、「自分の存在を認めてくれる」「アドバイスをくれる」「話に耳を傾けてくれる」といった情緒的サポートの友人に対する期待感は、ネッ友よりもリア友に対して高かったことを報告している。また、リア友への自己開示において交流手段に着目した研究では、尾崎・久東（2006）が女子大学生を対象にした質問紙調査で、本音を伝えるのに利用しているコミュニケーション手段は、対面、電話、FAX、携帯電話の通話、携帯電話のメール、パソコンのメールのうち対面が最も多かったことを報告している。そして、古谷・坂田・高口（2005）が看護学生を対象にした質問紙調査で、看護学生は友人関係において親密度が高くなると、対面では悩み事に関する自己開示が増加し、携帯メールでは将来の目標や噂話が増加したことを示した。リア友への自己開示において、交流手段が実生活である場合は交流手段がメール等である場合に比べて悩みや本音等は多く自己開示されると示唆される。古谷ら（2005）では

将来の目標と噂がいずれも携帯メールでの自己開示が増えた内容として示されたが、これは対象者が看護学生で自己開示する対象が看護学校でのリア友であることから、将来の目標の一つであろう看護師になるということは公然であったと考えられる。そのため、隠す必要のない浅い話題に関しては交流手段がメール等である場合にも多く話題にされるであろうと考えられる。

自己開示する者の個人要因の一つである発達段階の影響に関しては、井上・立花（2012）が高校生と大学生を対象にした質問紙調査で、高校生は自己開示をして同じ立場であることを示して共感するが、大学生では必ずしも自己開示せずに相手の立場に立って共感することが可能であるという違いを報告している。そのため、自己開示について検討する際には自己開示をする者の年代を限定することが望ましいだろう。また、年代によってソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）の普及率や使用率が異なることが報告されているため（総務省, 2015）、CMCの種類を限定する上でも年代は限定することが望ましい。

### Twitterの特徴

ネット友を作るきっかけになりうるSNSは複数あるが、20代以下でのSNSの利用はLINE, Twitter, Facebook, mixiの順で多い（総務省, 2015）。LINEは電話番号またはLINEアカウントを知った者同士がやり取りを行うサービスであるが、使用実態は携帯メールに近く既知の友人との間に用いられやすいため、ここでは2番目に多く利用されていたTwitterをネット友を作るきっかけとなったSNSとして取り上げたい。TwitterはSNSを利用している人の約31%が利用しており（総務省, 2015）、2017年10月には日本でのTwitterの月間利用者数が4500万人を超えた（Twitter Japan, 2017）。Twitterは、140文字を上限にした文や画像をTwitterのアカウントを取得した者がインターネットに投稿するサービスである。FacebookやmixiとTwitterを比較すると、Facebookやmixiは現実での関係がある友人とのコミュニケーションが多いがTwitterはインターネット上での友人との交流が多いこと（樋口・河野, 2012）、Facebookやmixiでは既知の友人との交流が多いのに対してTwitterでは既知の友人が少ないことが報告されている（石井, 2011）。

Twitterで最も多いツイート（Twitterへの投稿）の内容は「自分自身の出来事について」であり、Twitterの利用動機には「新しい友人・知人を作るため」等の項目か

ら構成される因子の存在が提案されている（北村・佐々木・河井, 2016）。また、10-40代のTwitterアカウント所持者3000名以上を対象にTwitterの利用動機による利用頻度と利用形態の差異を検討したWeb調査で、タイムライン閲覧、タイムライン以外閲覧、ツイート、会話ではいずれも実況/情報探索動機は共通しているが、それ以外に関わる動機が異なること、ツイートや会話の頻度には自己呈示動機の低さが効いていることが示されている（柏原, 2011）。自己呈示とは自分にとって望ましい印象を与えようとして意図的に振る舞うことで、自己について意図的に伝達する自己開示とは区別される。Twitterでは自分自身についてをよく投稿するが自己呈示の動機は低いことから、ネット友への自己開示の検討においてTwitterは適したSNSであると言えよう。

リア友への自己開示は、Twitterを通じて知り合い対面することなくSNS上で交流をするネット友への自己開示に比べて高いと予想される。それは、Facebookやmixiでは個人情報の開示度が高いのに対してTwitterでは個人情報の開示度が低いという報告（石井, 2011）やTwitterよりも日常で自己開示を行っていたという報告があるためである（小比田, 2014）。ただし、石井（2011）も小比田（2014）も幅広い年代を対象にしているため、本研究では青年に限定してこの点を検討する。また、Twitterでは趣味のことを取り上げる人が多い。「趣味アカ」と呼ばれる趣味を主に取り上げるアカウントを作成して活用するユーザーが存在し、大学生での「趣味アカ」の所有は「日常（普段用）アカ」に次いで多い（青山, 2018）。加えて、Twitterの利用目的は、趣味に関する情報収集が30.6%と最も高い（樋口・河野, 2012）。趣味に特化されやすいというTwitterの特徴を踏まえると、自己開示の内容が趣味である場合は、リア友とネット友の間に自己開示の差がない、あるいはリア友よりネット友の方が自己開示される可能性が考えられる。そして、Twitterのアカウントには公開アカウントと鍵付きアカウントがある。公開アカウントは自分のツイートをインターネット上の誰でも閲覧することができ、鍵付きアカウントは自分が許可したユーザーにしかツイートは公開されない。自己開示を抑制する要因には公開リスクへの懸念が指摘されているため（小比田, 2014）、公開リスクへの懸念が低くなる鍵付きアカウントは、公開アカウントに比べて自己開示される可能性が考えられる。

## 目的と仮説

Twitter のアカウントを持つ青年を対象に、リア友とネットで自己開示の程度に差があるかを検討することを目的とした。また、リア友については主たる交流手段が実生活の場合と SNS である場合の自己開示の差、ネット友については公開アカウントと鍵付きアカウントの自己開示の差についても検討した。

仮説 1：リア友へはネット友に比べて自己開示される。特に、深い話に関してはリア友へ自己開示されやすいだろう。ただし、自己開示の内容が趣味である場合は、リア友とネット友に差がない、あるいはネット友の方が自己開示される可能性が考えられる。

仮説 2：リア友への自己開示において、交流手段が実生活である場合は、交流手段が SNS である場合に比べて悩みや本音等は自己開示される。

仮説 3：ネット友への自己開示において、鍵付きアカウントは、公開アカウントに比べて自己開示される。

## 方法

### 参加者

Twitter のアカウントを持ち、Twitter で知り合い対面することなく SNS 上で交流を続けている友人と実生活で知り合い交流を続けている友人の両方がいる 18-30 歳<sup>注2</sup>の男女に回答を依頼し、67 名から回答を得た（男性 28 名、女性 39 名、平均年齢は 21.96 ( $SD=2.86$ ) 歳）。

### 調査時期・手続き

2018 年 7 月下旬から 10 月中旬までの間、Google フォームで作成した Web アンケートを Twitter で拡散した。(1)18-30 歳である、(2) Twitter で知り合い SNS 上で交流を続けている友人がいる、(3)実生活で知り合い交流を続けている友人がいるという 3 つの条件が当てはまる人を対象にしていることと Web アンケートの URL を載せて第 2 筆者がツイートした。拡散してもらえるように拡散希望のタグをつけ、筆者らの知り合いに声をかけてリツイートしてもらった。参加者は上記の URL にパソコンやタブレット、スマートフォン等でアクセスし、任意参加・匿名で好きな時間・場所で回答した。

### 質問紙

自己開示の程度を測定するために丹羽・丸野（2010）の自己開示の深さを測定する尺度を用いた<sup>注3</sup>。この尺度は、レベルⅠ：趣味（7 項目）、レベルⅡ：困難な経験（4 項目）、レベルⅢ：決定的ではない欠点や弱点（6 項目）、

レベルⅣ：否定的な性格や能力（7 項目）の 4 因子 24 項目で構成された（付録）。質問紙では、「Twitter で知り合い、SNS 上で交流しているが、会ったことのない同性の友人を 1 人思い浮かべて、次の質問に教えてください。」「実生活で知り合い、交流のある同性の友人を 1 人思い浮かべて、次の質問に教えてください。」と教示を変えて、それぞれに回答を求めた。回答は、何も話さない(1)、あまり話さない(2)、どちらかといえば話さない(3)、どちらでもない(4)、どちらかといえば話す(5)、まあまあ話す(6)、十分に詳しく話す(7)の 7 段階評定であった。各因子を構成する項目の平均点を下位尺度得点にした。

また、性別、年齢、職業、リア友を想定した回答には当該のリア友との中心的な交流の手段は実生活か SNS か、ネット友を想定した回答にはアカウントが公開アカウントか鍵付きアカウントかにも回答を求めた。

## 研究倫理

本研究は東海学院大学研究倫理委員会による事前の承認を受けた（No.2018-19）。

## 結果

### 記述統計

回答者の職業の内訳は、学生 41 名、社会人 26 名であった。また、自己開示のレベルⅠ～Ⅳまでの因子間相関を確認した。リア友、ネット友と共に 4 因子すべての組合せで高度に有意な正の相関が示された（表 1、表 2）。

### リア友とネット友への自己開示の差

リア友とネット友で自己開示に差が見られるかを自己開示のレベル別に検討した。レベル別に各群の平均値と  $SD$  を図 1 に示す。友人を独立変数、自己開示の下位尺度得点を従属変数に対応のある  $t$  検定を行った。その結果、レベルⅠからレベルⅣまでのすべてのレベルで、リア友への自己開示がネット友への自己開示よりも有意に高かった（レベルⅠから順に、 $t(66)=2.08, p=.042, d=.32$ ;  $t(66)=2.17, p=.034, d=.28$ ;  $t(66)=2.89, p=.005, d=.46$ ;  $t(66)=2.24, p=.029, d=.33$ ）。効果量はすべてのレベルで小さかった。

表 1 リア友の因子間相関

	レベルⅠ	レベルⅡ	レベルⅢ	レベルⅣ
レベルⅠ：趣味	—	.56 ***	.61 ***	.57 ***
レベルⅡ：困難な経験	—	—	.71 ***	.76 ***
レベルⅢ：決定的ではない欠点や弱点	—	—	—	.91 ***
レベルⅣ：否定的な性格や能力	—	—	—	—

\*\*\* $p<.001$

## リア友とネット友に対する自己開示の差

表2 ネット友の因子間相関

	レベルⅠ	レベルⅡ	レベルⅢ	レベルⅣ
レベルⅠ：趣味	—	.47 ***	.46 ***	.46 ***
レベルⅡ：困難な経験	—	—	.70 ***	.78 ***
レベルⅢ：決定的ではない欠点や弱点	—	—	—	.86 ***
レベルⅣ：否定的な性格や能力	—	—	—	—

\*\*\* $p < .001$

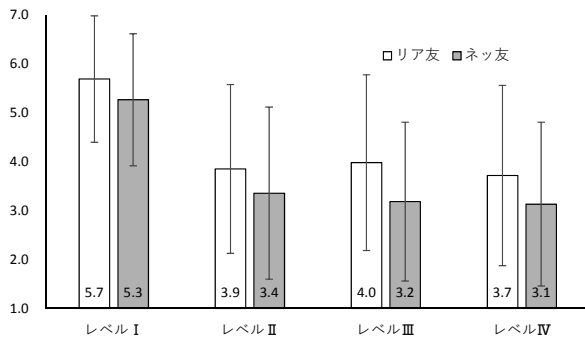


図1 リア友とネット友への自己開示（レベル別）

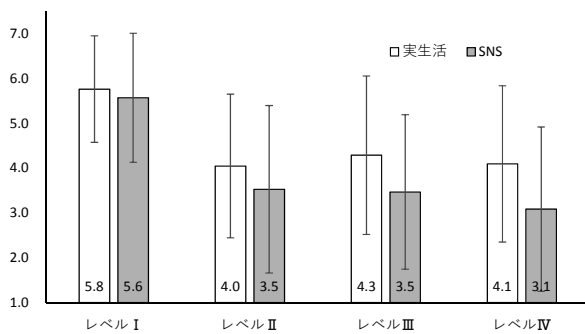


図2 リア友：交流手段別の自己開示（レベル別）

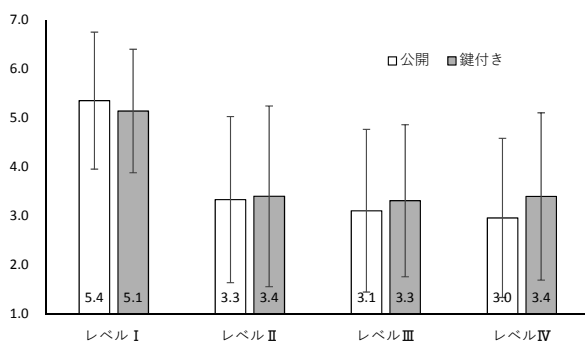


図3 ネット友：アカウント種類別の自己開示（レベル別）

### リア友における交流手段による自己開示の差

リア友に対して実生活と SNS のどちらを中心に交流しているかにより自己開示に差が見られるかを、自己開示のレベル別に検討した。レベル別に各群の平均値と

SD を図2に示す。交流手段を独立変数、自己開示の下位尺度得点を従属変数に対応のない t 検定を行った。その結果、レベルⅣ「否定的な性格や能力」においては交流手段が実生活である場合は SNS よりも自己開示は有意に高かった（レベルⅠから順に、 $t(65) = 0.59, p = .56, d = .14$ ;  $t(65) = 1.18, p = .24, d = .29$ ;  $t(65) = 1.83, p = .07, d = .46$ ;  $t(65) = 2.21, p = .03, d = .56$ ）。レベルⅣでは中程度の効果量が示された。

### ネット友におけるアカウントの種類による自己開示の差

Twitter のアカウントが公開アカウントか鍵付きアカウントかにより自己開示に差が見られるかを、自己開示のレベル別に検討した。レベル別に各群の平均値と SD を図3に示す。アカウントの種類を独立変数、自己開示の下位尺度得点を従属変数に対応のない t 検定を行った。その結果、レベルⅠからレベルⅣまでのすべてのレベルで、Twitter アカウントが公開アカウントか鍵付きアカウントかで自己開示に有意差は見られなかった（レベルⅠから順に、 $t(65) = 0.62, p = .54, d = .16$ ;  $t(65) = 0.15, p = .88, d = .04$ ;  $t(65) = 0.50, p = .62, d = .13$ ;  $t(65) = 1.05, p = .30, d = .26$ ）。

## 考察

### リア友とネット友への自己開示の差

仮説1「リア友へはネット友に比べて自己開示される」は、4つのレベルすべてでリア友への自己開示はネット友への自己開示より高かったため支持された。また、「深い話に関してはリア友へ自己開示されやすいだろう」は、レベルⅢやレベルⅣではレベルⅠやレベルⅡよりも高い効果量が示されたため不支持ではなかったが、4つのレベルいずれにおいても効果量は小さかったという点ではあまり差異はないため十分に支持されたとは言い難い。「自己開示の内容が趣味である場合は、リア友とネット友に差がない、あるいはネット友の方が自己開示される可能性が考えられる」は、レベルⅠでリア友への自己開示がネット友への自己開示より高かったため不支持であった。

### リア友における交流手段による自己開示の差

仮説2「リア友への自己開示において、交流手段が実生活である場合は、交流手段が SNS である場合に比べて悩みや本音等は多く自己開示される」は、レベルⅣで実生活では SNS よりも自己開示されていたため、支持された。尾崎・久東（2006）で対面では本音が伝えられ

たことや古谷ら（2005）で悩みは対面で自己開示される内容であったことが、学生に限定しない青年を対象にした本研究でも確認された。

レベルⅠ、Ⅱ、Ⅲで主たる交流手段が実生活と SNS で差がなかったことから、浅いレベルの自己開示については交流手段の差は見られなかった。本研究の対象者は平均年齢が 21.96 歳で大学 3 年生や 4 年生、社会人も対象者に含まれていた。大学 3、4 年生や社会人になると専門学校や大学 1、2 年生と異なり、学校や職場で毎日友人と対面するという生活を送らない人が増える。SNS で交流するリア友とは、対面していない時でさえも交流を持ちたい相手であったと考えられ、主たる交流が対面である場合に比べて交流が SNS である相手は、親密度が高い相手になっていた可能性が考えられる。親密度や対人魅力が高い相手には自己開示が行われやすい（出口・吉田, 2004）。本研究では交流手段による親密度の違いを測定しなかったため、親密度を統制した上でも仮説が支持されるかは検討が必要である。

### ネットにおけるアカウントの種類による自己開示の差

仮説 3「ネット友への自己開示において、鍵付きアカウントは、公開アカウントに比べて自己開示される」は、公開アカウントと鍵付きアカウントで自己開示に差がなかったため、不支持であった。

太幡・佐藤(2016)は mixi 利用者を対象に web 調査をし、ネット犯罪被害へのリスク認知が高いほど、プロフィール上の自己表出性が高かったことを報告している。これは、ネット犯罪被害へのリスクを高く認知しているほど自己表出をしていたことを意味し、一見逆の結果に見える。この結果に対して太幡・佐藤(2016)は、ネット犯罪の生起は低く見積もられがちであること、ネット上の自己表出においてはリスク認知があまり影響せず自己開示欲求の高さが影響することを述べ、自己開示欲求の高さが自己表出性やリスク認知の高さにつながった可能性に言及している。前者の指摘のように、ネット犯罪被害へのリスク（太幡・佐藤, 2016）や公開リスクへの懸念（小比田, 2014）がそもそも低くて自己開示への影響が小さいのであれば、同様の背景から公開アカウントと非公開アカウントで自己開示の差が見られなかったことを説明することができる。

### 本研究の意義および今後の課題

本研究では青年を対象にしてリア友と Twitter のネット友への自己開示の差を検討し、幅広い年代を対象とした

調査で指摘されてきたリア友への自己開示の高さが青年においても同様に見られることが確認された。また、リア友における交流手段による自己開示の差やネット友におけるアカウントの種類による自己開示の差にも踏み込むことができた。

ただし、本研究は Web アンケート回収時期を延長して筆者らが回答依頼を繰り返したものの、サンプルサイズは十分ではなかった。青年期ではリア友への自己開示は Twitter のネット友に比べて高いことについては、より多くのサンプルサイズで再検討できると望ましいであろう。また、自己開示の内容を踏まえたリア友とネット友への自己開示の違いについて、特に趣味については趣味アカに限定することでレベルⅠにおける自己開示の差を再検討したい。また、一般的に Twitter でのつながりは“弱いつながり”と見なされるが（石井, 2011）、Twitter は Facebook や mixi といった“強いつながり”の SNS と同等以上のオンラインでの友人間の交流がなされているという指摘がある（北村ら, 2016）。趣味アカに限定したり、“強いつながり”が示された場合に限定したりしても同様の結果が示されるかの検討は今後の課題である。また、リア友における交流手段による自己開示の差に関しては、親密度の影響を除外しても本研究の結果が一貫して示されるかについて確認が必要である。ネットにおけるアカウントの種類による自己開示の差に関しても、Twitter 利用者が公開アカウントと鍵付きアカウントをユーザーはそれぞれどのように捉えているかを明らかにした上で、結果を解釈する必要があるだろう。

### 謝辞

本調査にご回答くださった皆さま、拡散に協力してくれた筆者らのリア友、ネット友にこの場をかり改めて御礼を申し上げます。

### 注

注 1：本稿は第 2 著者が 2018 年度に東海学院大学人間関係学部心理学科に提出した卒業論文を第 1 著者が再分析し全面的に改稿したものである。

注 2：何歳から何歳までを青年期と捉えるかは研究により異なるが、本研究ではネット問題等とも関わりが深い内閣府（2016）の「子ども・若者育成支援推進法」（平 21 法 71）に基づく大綱に則り、18-30 歳とした。

注 3：自己開示に関する質問紙や尺度には、本研究で用いた自己開示の深さを測定する尺度（丹羽・丸野, 2010）以外に、自己開示質問紙(ESDQ-45)（榎本, 1998）や自己

開放性尺度(ISDQ) (飯長, 1977), 独自で作成された項目等があるが(e.g.,太幡・佐藤, 2016, 佐藤・吉田 2008, 熊野 2002), 本研究では「悩み」等の深い話と「趣味」について検討しなかったため, それらが因子で抽出されている丹羽・丸野(2010)を用いた。

## 引用文献

- 青山征彦(2018). 大学生における SNS 利用の実態—使い分けを中心に, 社会イノベーション研究, 13(1), 1-18.
- 出口拓彦・吉田俊和(2004). 自己開示の内面性が対人魅力に及ぼす影響—被開示者における対人的志向性の効果に関する縦断的研究—, 対人社会心理学研究, 4, 51-56.
- 榎本博明(1987). 青年期 (大学生) における自己開示性とその性差について, 心理学研究, 58(2), 91-97.
- 古川良治(2008). インターネットにおける自己開示研究の方向性に関する考察, 社会イノベーション研究, 3(2), 1-18.
- 古谷嘉一郎・坂田桐子・高口 央(2005). 友人関係における親密度と対面・携帯メールの自己開示との関連, 対人社会心理学研究, 5, 21-29.
- 樋口雄太郎・河野義広(2012). 主要 SNS mixi, Twitter, Facebook の利用調査に基づく性質の相違点, 社会情報学会学会大会研究発表論文集, 97-100.
- 飯長喜一郎(1977). グループ合宿における自己開放性, 東京大学教育学部紀要, 17, 77-84.
- 井上清子・立花彩加(2012). 自己開示性と被開示性の関連についての一考察—高校生と大学生の違いを中心に—, 生活科学研究, 34, 169-175.
- 石井健一(2011). 「強いつながり」と「弱いつながり」の SNS—個人情報開示と対人関係の比較—, 情報通信学会誌, 29(3), 25-36.
- 柏原 勤(2011). Twitter の利用動機と利用頻度の関連性—「利用と満足」研究アプローチからの検討—, 慶應義塾大学大学院社会研究科紀要, 72, 89-107.
- 北村 智・佐々木裕一・河井大介(2016). ツイッターの心理学, 誠信書房.
- 熊野道子(2002). 自ら進んで自己開示する場合と尋ねられて自己開示する場合との相違, 教育心理学研究, 50, 456-464.
- 小比田涼介(2014). Twitter での自己開示とシャイネス—シャイな人々にとっての自己開示機会としての

- Twitter—, 筑波応用言語学研究, 21, 124-137.
- 内閣府(2016). 子供・若者育成支援推進大綱 平成 28 年 2 月 子ども・若者育成支援推進本部決定 <https://www8.cao.go.jp/youth/wakugumi.html> (閲覧日 2019.11.9) .
- 丹羽 空・丸野俊一(2010). 自己開示の深さを測定する尺度の開発, パーソナリティ研究, 18(3), 196-209.
- 尾崎かほる・久東光代(2006). 女子学生の友人とのコミュニケーションスタイルと交友関係意識, 日本女子大学紀要人間社会学部, 17, 73-85.
- 佐藤広英・吉田富二雄(2008). インターネット上における自己開示—自己・他者の匿名性の観点からの検討—, 心理学研究, 78(6), 559-566.
- 総務省 (2015). 平成 29 年版情報通信白書, <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/html/nc111130.html> (閲覧日 2019.10.31) .
- 杉浦春雄・高橋和代・杉浦浩子(2009). 大学生のインターネット・携帯電話の利用状況と友人関係との関連, 岐阜薬科大学紀要, 58, 29-34.
- 太幡直也・佐藤広英(2016). SNS 上での自己情報公開を規定する心理的要因, パーソナリティ研究, 25(1), 26-34.
- Twitter Japan(2017). 「おかげさまで日本国内の月間利用者数が 4500 万を超えました。どうもありがとうございます。」, <https://twitter.com/twitterjp/status/923671036758958080?lang=ja> (閲覧日 2019.10.31) .

## 付録 自己開示の深さを測定する尺度(丹羽・丸野, 2010)

### レベルⅠ：趣味

1. 好きなもの (音楽・映画・服装など)
4. 休日の過ごし方
7. 最近の楽しかったできごと
12. 最近夢中になっていること
16. 趣味にしていること
19. 楽しみにしているイベント
22. これから趣味としてやってみたいこと

### レベルⅡ：困難な経験

6. 困難な状況を誰かに助けてもらった経験
15. 困難な状況を乗り越えるために頑張ってきたこと
17. つらい経験をどのように乗り越えてきたかということ
23. 過去のつらい経験が現在どのように役に立っている

るかということ

レベルⅢ：決定的ではない欠点や弱点

2. 「少しダメだな」と前から思っているところ（時間にルーズ, など）
5. 直さなければならないと思っているが, なかなか直らないささいな欠点（時間にルーズ, など）
8. ささいな欠点かもしれないが（時間にルーズ, など）, とときどき落ち込んでしまうこと
10. ある経験を通して「自分は少しダメだな」と思ったこと（遅刻した, など）
14. ささいな欠点（時間にルーズ, など）について他者から心配された経験

20. ささいな欠点について目ごろ思い悩んでいること

レベルⅣ：否定的な性格や能力

3. 自分の性格のすごく嫌なところ（人の成功を素直に喜べない, など）
9. 自分の性格のすごく嫌な部分が出てしまったできごと
11. 自分の能力についてひどく気にやんでいること
13. 能力不足が原因で, 目標が達成できなかった経験
18. 能力で劣等感を抱いているところ
21. 能力に限界を感じて失敗した経験
24. 自分のせいで人をひどく傷つけてしまった経験

## Differences in the Degree of Self-disclosure Between Friends in Reality and on Twitter

ADACHI Yuko and KITAJIMA Shiho

### Abstract

In this study, we examined whether a difference existed in the degree of self-disclosure between friends in reality and on Twitter. Web questionnaires were distributed on Twitter to adolescents aged between 18–30 approximately; however, only 67 responses were received. In order to measure the depth of self-disclosure, we used the Niwa and Maruno (2010)'s scale considering the following levels: hobbies (Level 1), difficult experiences (Level 2), non-fatal weaknesses (Level 3), and negative characteristics and abilities (Level 4). At all levels, self-disclosure was higher between friends in reality than those on Twitter. Further analysis led to the conclusion that, at the level of negative characteristics and abilities, self-disclosure was higher when the means of interaction was in reality than on social networking services (SNS). In the realm of Twitter, however, there was no difference in self-disclosure in relation to public and keyed accounts.

**Keywords:** Self-disclosure, Adolescents, Friends, Twitter